

目が覚めたら、四角い部屋の中だった。

窓も、寝台も無い無機質な空間。部屋全体が埃っぽい。前方に赤く錆び付いている頑丈な扉があった。

殴られたところが鈍痛となつて残つてはいるものの、幸いにも拘束はされていない。

聡志は飛び起きると、扉の取っ手を掴んだ。闇雲に動かしてみたが、びくともしない。

「先輩はどこだ。いいか。先輩に指一本でも触れてみる。お前ら全員叩きのめしてやるからな」

扉を叩き喚き散らす。金属製の扉は反響して大きな物音を生じた。しかし、どんなに音を立てても、残響が静寂に溶け込んでいくだけだった。

「くそっ」

拳を強く打ち付け、腕に頭を乗せて考える。

「ここはどこか。あれからどれほど経つたのか。先輩はどうなつたのか。あいつらは何者なのか。これから自分はどうなるのか。そして、第四学群とは何なのか。」

不安と焦燥が鼓動を早くする。

冷静になれ。

聡志は大きく深呼吸すると、目を閉じて考えた。

僕は先輩と一緒に地下道に潜っていた。目的は第四学群の調査。先輩が黒いボタンを押すと警報が鳴り響き、そこから逃げる最中、全身をアーマーに包んだ男達に僕たちは拘束された。

そういえば、と聡志はスマートフォンを探した。携帯機は便利だ。ネットという繋がりを通じて、簡単に脅しをかけられる。実際、あの男たちはそれが原因で聡志を生かしておいたのだろう。しかし、どんなに探しても聡志のスマートフォンは見当たらなかった。

おそらく没収されたのだと思われるが、四方を分厚いコンクリートで包まれているこの空間に電波が入ると思えない。せめて時間だけでもわからないかと期待したが、聡志は腕時計を持ち歩いていない。あれから五分経つたのか、それとも数時間は経過しているのかさえ推測するしかなかった。スマートフォンを探すついでにわかったことが一つあった。どうやら連中が持っていた銃は本物ではなかったらしい。大容量モバイルバッテリーには楔がついた針状の塊が埋れていた。そこから千切れたコードが垂れさがっている。詳しい構造はわからないが、電流で相手を無力化させる類のものだろう。その先端が触れているところを中心に広く焼け爛れている。た。

今更ながら、ぞつとする。実のところ、聡志はたかをくくっていた。これは僕に仕掛けられた壮大な冗談だったのではないかと。だから銃口を向けられても飄々としていられたし、撃たれたときは内心ひやりとしたもののそういう演出なのだと気にしない事になっていた。

しかし、現実として連中は聡志を監禁している。実弾では

無いとはいえ、下手をしたら軽い怪我ではすまない物を平気で撃ってきた。

先輩は無事だろうか。

連中は先輩のことを知っているようだった。そして先輩もまるでこうなる事を知っているかのよう。いや、やめよう。僕が先輩を疑つてどうする。

だが、蚊帳の外だ。天月聡志だけが何も知らなかった。

重く、苦しい重低音が響く。耳障りな音と共に扉が開いた。

聡志は寝てしまつていたようだ。目をあけるとそこには神宮茜が立つていた。

「やあ。おはよう聡志君。こんなところで眠るなんてよほど疲れていたんだね、可愛そうに。でもね、ここは入つてはいけないところなんだよ。KEEPOUTなんだよこは。知ってるよね？知らないわけが無いよね？それだけならまだしも、勝手にボタンを弄繰り回したあげく大人しくつかまつておけばいいものを、良い格好しいで結果わざわざ気を失つてご苦労様でしたとも言われると思つたのかい。全く良い迷惑だよ。……聞いているの？聞いているのかと聞いているんだ。」

茜は思いつきり聡志の胸を蹴り飛ばした。

息が詰まる。聡志は激痛から嗚咽を漏らす。

酸素。

脳に酸素が満足に行き渡らず、過呼吸気味でぼやけた視界の中確信する。

先輩じゃない。見た目はよく似ているがこの人物は、この男は茜先輩じゃなかった。

「ふう。じゃあ早速聞こうか。君はなんでここに来たの？どうしてあのボタンのことを知っていたの？茜とはどんな関係なの？」

畳み掛けるように問い詰められた。男の表情は笑顔だが、目はまるで笑っていない。

「……」

「ふーん、あ、そう。だんまりつてわけ。沈黙は金。至言だね。至言っていうのは美しいね。つまり美德だね。でも今の状況じゃあそれは愚策だね。愚かであるのは醜悪だね。大人しく従つてくれた方がこちらとしても楽なんだけど。しようがないね。スマートフォンに事を運びたかつたけど、残念だ」

そういつて、男は倒れている聡志の首を踏んだ。

「僕はね、こう見えても気が長いほうなんだ。でもね、無視されちゃうと悲しいな。悲しくて悲しくて、ちよびつと怒っちゃうかもよ」

男は踏んでいる力を徐々に強くする。冗談じゃない。この男以上に短気な人間がいてたまるか。

「最後に、もういちどだけチャンスあげようか。君はどうしてここに来たんだい？」

聡志は息も絶え絶えに質問に答える。

「ここに来たのは、ちよつとした好奇心だったんだ。第四学群なんてものが、本当にあるのかどうか、気になったんだよ」

「あのボタンを知っていたの？正直なところ君みたいな侵入者はね、いくらでもいるんだよ。でもあのボタンはね、知

っている人間しか知っていない。そしてね、あそこにボタンがあるのを知っているのは僕ぐらいなものさ。仮に、押すような人間がいたとするなら、それは敵ぐらいなものなんだよ。あれはそういう人間が押すようなボタンなのさ。……ものわかりが悪いね。つまりあれは僕がネズミをあぶり出すためにあえて作ったダミーなんだよ」

そういう連中が引つかかるように影でリークしてね、と男は言いながら聡志の顔を覗き込んだ。

「君はどこでこの情報を手にいったの？」

聡志は答えることが出来なかった。そもそも聡志はボタンの存在すら知らなかった。神宮が見つけ、押した。だとしたら、先輩はどこでそれを知ったのだろうか。

返事に窮する聡志の態度を見て、男は得心がいったように頷いた。

「君は、何も知らないんだね。茜が勝手にやったのかな。」

男はそう独りごちると思いついたように言った。「あっそういえばまだ名乗ってなかったね。僕の名前は神宮藍。覚えなくていいよ。どうせ忘れさせるから」

藍は、ガスマスクを着けていた。シューと空気が漏れる音がする。身体が動かない

「あっそうそう。お土産にいい事を教えてあげようか。第四学群なんものはね、存在しないんだ。じゃあどこにあると思っ」

脛が重い。意識が白に途切れそうになる。藍の手にはスマートフォンが握られていた。その画面には、見慣れたツイッターの画面が映っていた。

「せいぜい呟いておくれ」

聡志が完全に気を失ったのを見届けると、藍はおもむろに振り向いた。

「おい、そこにいるんだろ。出てきなよ。茜」

そこには、捕まっただけの神宮茜がいた。